

諸資料を基に考察する日米関係

—資料読解と対話を重視した活動—

地理歴史科 小田原健一、伊吹憲治、酒井 類、田中博章、山本真生

地理歴史科の新科目・歴史総合の導入が 2 年後に迫っている。また、本校シンポジウムの研究主題も新設された。このような状況の中で、学びの喜びを土台として、これからの時代を生きるための能力を育めるような授業開発に取り組んだ。教材として活用したのは日米関係に関する諸資料であり、資料読解と多様な解釈に繋げるための対話を重視した活動を実践した。成果と課題の両面が見えてきたが、今後も本実践を活かした探究活動・主題学習を取り入れていきたい。

<キーワード> 学びの喜び これからの時代を生きるための資質・能力 歴史総合 教科横断

1. はじめに

本稿は昨年 11 月の第 39 回高校教育シンポジウムにおいて公開授業および研究協議を行った授業実践の報告であり、当日の公開授業はもちろん、授業に向けた準備、授業後の研究協議および生徒アンケートを通じて出てきた成果や課題について述べていくこととしたい。

さて、本校は今年度より高校教育シンポジウムの研究主題を「これからの時代を生きるための資質・能力の育成—学びの喜びから広がる力—」と改めた。地理歴史・公民科の教員で昨年度から新しい研究主題に沿った授業内容の検討を重ねたところ、新しい研究主題は昨年度まで 6 年間掲げてきた研究主題「自立した学びのために—学びの喜びを感じられる授業開発—」を踏まえてのものであることを強く意識するようになった。そしてシンポジウムに向けた授業では、まず授業を通して生徒が学びの喜びを感じられること、次にこれからの時代を生きるための能力が身に付けられることを目指すこととした（図 1 参照）。

また 2018 年 3 月には新学習指導要領が公示され、続いて 7 月にはその解説も示され、周知の通り地理歴史科・公民科とも 2022 年度より新しい科目が導入されることになった。そこでシンポジウムでの公開授業に向け、現行課程の日本史・世界史の枠組みを外した新科目・歴史総合に着目し、この歴史総合の実施を見据えた授業を現行課程の世界史 A の中で実践することを検討した。

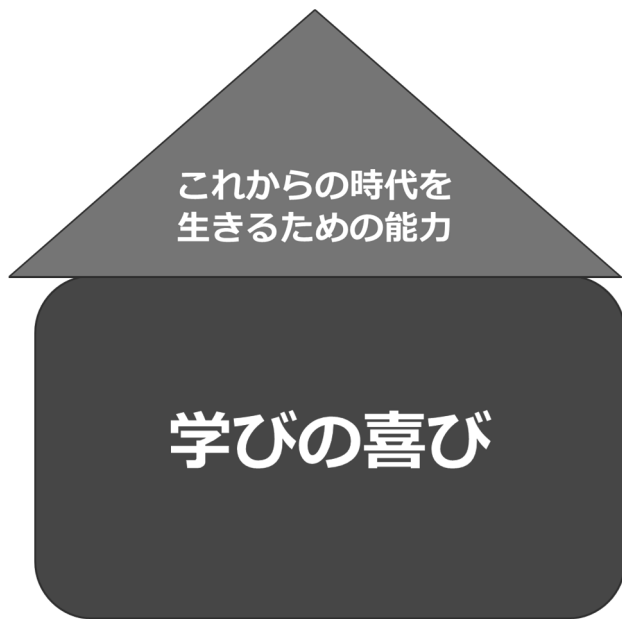


図1 (イメージ図)

学びの喜びを感じられる授業を展開し、その上で、これからの時代生きるための能力を育むことを目指した。なお後述するが、課題を見いだす力、課題解決に向かう力をこれからの時代を生きるための能力と捉えた。

2. 研究テーマの設定

歴史総合では目標の一つに「近現代の歴史の変化に関わる諸事情について、世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉え、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を理解するとともに、諸資料から歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。」が掲げられている。授業実践に向け、この目標にある「諸資料」を有効に活用すれば、生徒が学びの喜びを感じられる魅力的な授業を構築できるのではないかと想定した(図2参照)。

まず、授業で提示する諸資料については文献だけでなく、写真、絵、新聞記事、映像など生徒の興味・関心を引き出しやすいものを含めることとした。また文献については、可能な限り一次史料(もしくはそれに近いもの)とし、英文なども含めることとした。これは、次期学習指導要領で求められる教科横断的な視点で授業を組み立て、生徒に各教科の関連性を意識させることを意図したものである。

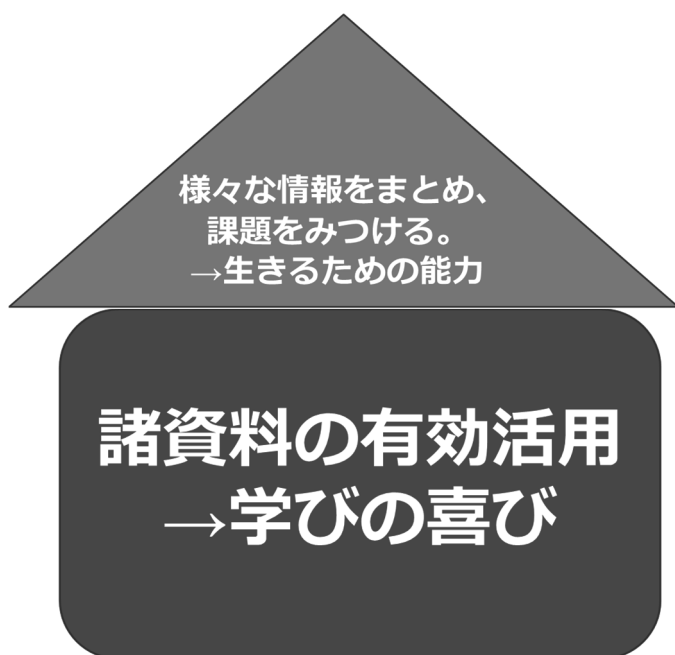



図2 (イメージ図)

【図：下段】

魅力的な資料に触れることが、学びの喜びに繋がると想定した。

さらに 

【図：上段】

諸資料の中から情報を整理し、そこから課題を見いだす力、課題解決に向かう力をこれからの時代を生きるための能力と想定した。

3. 授業に向けた準備

(1) 地理歴史・公民科会での検討

上記の構想を授業担当者の小田原（本稿の主著者）が固めた後、科会では授業の単元や取り扱う資料について検討を重ねてきた。その過程で、日米関係に関連する単元を取り上げる案が浮上した。理由は、英語の文献を含めて資料が豊富にあること、「現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を理解する」ための題材として適していること、歴史総合での実践を想定した授業展開が可能なことである。また、例えば日本の開国、太平洋戦争といった特定の時代・出来事に絞らず、日米関係史を概観するような授業の中で、生徒にはできるだけ多くの資料に触れさせることとした。その上でペリー来航以来、約100年に渡る複数の資料を基に今後の日米関係や国際社会について考察させ、より良い社会を築くために自らは何ができるかまで考えさせられるような授業展開を描いた。

(2) 高大連携での検討

科会での検討と並行して、本実践の共同研究者である愛知教育大学社会科教育講座准教授の真島聖子先生との打ち合わせを重ね、真島先生から毎回適切な助言をいただくことができた。初期の打ち合わせでは、対話的な授業について提案をいただいたが、対話は資料読解とともに本実践で重視する活動となった。授業の各場面で生徒同士が対話をする機会を設定し、そこでは「話し合う」こと以上に「聴き合う」ことを生徒に意識させた。これは資料の多様な解釈を可能にし、自分の考えと他者の考えを比較検討することで、より良い考えを構築することを狙ったものである。また、シンポジウム当日の公開授業における発表を中間発表とし、そこも対話の場とした。ここでさらに他者の多様な意見に触れて自らの考えを磨き、冬休み後に提出する最終レポートの作成に活かせるように指導した。

(3) 資料の収集

文献については可能な限り一次史料に触れさせたいという思いから、夏期休暇中に国立国会図書館を訪れた。同図書館のウェブサイトでも膨大な資料の閲覧が可能だが、現地ではか手に入れられないものも存在している。私が現地で入手したのは、『三条家文書』に収録されている日米和親条約の漢文版とペーブ・ルースの来日決定を報じた1934年7月18日の読売新聞の記事である。日米和親条約については日本語版も収録されているが、ウェブサイトでも閲覧可能なこと、一つ一つの文字については漢文版の方が判別しやすいことから複製を申し込まなかった。この他、日米修好通商条約や宣戦布告文も手に入れるつもりであったが、時間の都合で見送ることとした。インターネットが発達した現代とは言え、首都圏の方々の利便性を羨ましく思った一日でもあった。

これらの文献を本稿で紹介するのは、著作権の関係で認められなかったが、次の図3は本実践の進行予定と使用する資料を一覧にまとめたものである。

回数	内容	資料	1組	2・3組
第1回	ガイダンス・開国	日米和親条約 (漢文・英文含む)	9月17日(火)	9月18日(水)
第2回	南北戦争	ゲティスバーグ演説(英文 含む)	9月24日(火)	9月20日(金)

第3回	20世紀前半の日米関係	日露戦争の風刺画 及び ベープ・ルース来日を伝える 新聞記事	9月25日(水)	9月27日(金)
第4回	太平洋戦争	「映像の世紀」 及び 「玉砕総指揮官」の絵手紙	9月30日(月)	10月2日(水)
第5回	日本国憲法+ガイダンス	日本国憲法 (英文含む) 及び ベアテ・シロタ・ゴードン (24条の起草者)に関する 新聞記事	10月1日(火)	10月9日(水)
第6回	調査活動1(個人)		10月15日(火)	10月11日(金)
第7回	調査活動2(個人)		10月21日(月)	10月16日(水)
第8回	調査活動3(情報交換)	*対話の場を設定	10月28日(月)	10月18日(金)
第9回	調査活動4(個人)		10月29日(火)	10月23日(水)
第10回	ポスター作成1		11月5日(火)	10月25日(金)
第11回	ポスター作成2		11月11日(月)	10月30日(水)
第12回	ポスター作成3(完成)		11月12日(火)	11月1日(金)
第13回	発表		13日(水) シンポジウム	11月6日(水)
*以降、各自でレポート作成。冬休み課題を兼ね、1月7日(火)にレポート提出。				

図3 授業の進行予定と使用した資料の一覧

実際は第5回までの講義形式でプラス1回、第6回以降の調査・ポスター作成でプラス1回となり、第15回の授業が発表の場となった。また、レポート提出は冬休み明け直後の予定でいたが、時間を十分確保するために2月10日を提出締め切りとした。

4. 授業実践の報告

(1) 当初予定の第1回～第5回(実際は第1回～第6回)

ここでは日米関係史を通史的に概観する授業を行った。実際に授業で使用したプリントの一部(図4・5)を以下に示す。各授業の導入で教科書の基礎的な内容を理解するため、生徒はプリントの空欄補充に取り組み、そこから諸資料に触れ、読み取ったことや感じたことについて意見交換する活動を行った。

「諸資料を基に考察する日米関係」

6 太平洋戦争

(1) 教科書P183~185を参考にして、次の文中の空欄を埋めよう。

日本は行き詰まった中国との戦争の打開を求めて、1941年フランス領インドシナに兵を進めた。これに反発したアメリカが、日本への石油禁輸に踏み切ったため、日米の対立は深まった。日米の交渉が不調に終わると12月8日、日本はハワイの(1)を奇襲攻撃し、これを機に太平洋戦争が始まった。大東亜共栄圏の建設を掲げる日本は太平洋・東南アジア各地を占領したが、1942年(2)での大敗以降は劣勢となった。1944年アメリカ軍による日本への空襲が開始され、45年、硫黄島を占領したアメリカ軍は4月には(3)に上陸した。8月アメリカ軍は(4)(5)に相次いで原子爆弾を投下し、日本は甚大な被害を受けることとなった。日本はアメリカを中心とする連合国が発表した(6)を受け入れ、降伏をした。

(2) 戦争に関連する映像資料を見てみよう。

(3) 映像を見て、感じたことを書き込もう。

(4) 別紙資料（その4 「硫黄島からの手紙」）を読んでみよう。

(5) 資料を読んで、感じたことを書き込もう。

(6) 当時、遠く離れた家族に手紙を届けるには、どんな困難があったのだろうか？

図4 当初予定の第1回（ガイダンスと開国）の授業で使用したプリント

「諸資料を基に考察する日米関係」

1 はじめに

(1) アメリカと聞いて頭に浮かぶものを書き込もう。

(2) 日米関係と聞いて頭に浮かぶものを書き込もう。

2 日本の開国

(1) 教科書P139を参考にして、次の文中の空欄を埋めよう。

17世紀以来、江戸幕府はいわゆる“(1)”政策を採ってきたが、1853年にアメリカの(2)が艦隊を率いて来航すると、1854年に(3)条約、58年に(4)条約を結んで開国に踏み切った。

(2) 次の各問について考えよう

問1 幕府の役人とペリー達はどうやって（何語で）交渉したのだろうか？

問2 ペリーの艦隊には日本語を理解している通訳がいた。彼はどうやって日本語を学んだのだろうか？

問3 別紙資料（その1 各国語版の条約）を読んでみよう。

(2) 当初予定の第 6 回～第 12 回（実際は第 7 回～第 14 回）

ここで生徒は各自のペースで調査活動とポスター作成を行った。図 3 の進行予定にあるそれぞれの回数是一例ではあるが、ある程度調査が進んだ段階で、情報交換の場を設定した。もちろん、これ以外でも生徒はお互いに話し合っていたが、この情報交換の場は、同じ資料に基づいて考察している者同士が良い影響を与え合えるように、授業者側で小グループを指定して行った。後ほど生徒アンケートについて紹介するが、多くの生徒はこの情報交換の場が大いに役立ったと回答している。以下の図 6 は調査活動に入る前のガイダンスで使用した資料、図 7 は情報交換時に使用したワークシートである。

【諸資料を基に考察する日米関係】

授業ではA3で配付

8 これからの日米関係

【課題】

- (1) 現在の日米関係（または国際社会）の問題点を探そう
- (2) これからの日米関係（または国際社会）をより良くする方法を探そう
- (3) (1)(2)について発表しよう
- (4) 最後にレポートにまとめよう

【課題の達成方法】

- (1) これまでの授業で触れた諸資料（映像資料除く）を再確認する。
 - 1 日米和親条約 2 ゲティスバーグ演説 3 風刺画（日露戦争前）
 - 4 新聞記事（ペープルース来日） 5 硫黄島からの手紙 6 日本国憲法
- (2) 最も興味をもった資料に関連する日米の歴史や、現在の日米関係（または国際社会）について調べ、問題点やその解決方法を探す。
- (3) 1～6のいずれかの方法で発表する。
 - 具体例 1 日米関係（または国際社会）をより良くするための条約を提案する
 - 2 日米関係（または国際社会）をより良くするために演説で訴える
 - 3 日米関係（または国際社会）の問題点を風刺画で描き、より良くする方法を説明する
 - 4 日米関係（または国際社会）をより良くするための企画を提案し、新聞記事で訴える
 - 5 日米関係（または国際社会）をより良くするために誰かに手紙で訴える
 - 6 日米関係（または国際社会）をより良くするために日本国憲法どう活かすか提案する

【課題達成までの予定】

		1組	2・3組
第0回	日本国憲法	10月18日（金）	10月11日（金）
第1回	ガイダンス +調査活動1（個人）	10月21日（月）	10月16日（水）
第2回	調査活動2（個人+情報交換）	10月28日（月）	10月18日（金）
第3回	調査活動3（個人）+発表準備0	10月29日（火）	10月23日（水）
第4回	発表準備1	11月5日（火）	10月25日（金）
第5回	発表準備2	11月11日（月）	10月30日（水）
第6回	発表準備3 +発表練習	11月12日（火）	11月1日（金）
第7回	発表	13日（水） シンポジウム	11月6日（水）
冬休み課題を兼ねてレポート作成（1月7日（火）提出）			

【調査方法】

1 書籍

- ①小田原が授業準備に購入したもの *授業翌日の朝には返却
- ②学校の図書館を利用

③その他の図書館または自費購入

2 ウェブサイト

- 「国立国会図書館 史料に見る日本の近代」<https://www.ndl.go.jp/modern/index.html>
- 「外務省 外交史料館」<https://www.mofa.go.jp/mofai/annai/honsho/shiryo/index.html>
- 「国立公文書館 アジア歴史資料センター」<https://www.jacar.go.jp/index.html>
- 「アメリカンセンタージャパン 国務省出版物」
<https://americancenterjapan.com/aboutusa/translations/>

【発表方法】

- (1) 5～6名程度の小グループの中で発表します。（グループは後日決定）
- (2) 発表時間は1人5分+質疑応答・入れ替え2分
- (3) 【条約・風刺画・新聞企画】を選んだ人は実物を作成（キーノートを利用するかB紙にペン書き）して口頭で説明をする。必要なら補足資料も作成する。
【演説・手紙】を選んだ人は補足資料を作成（キーノートを利用するかB紙にペン書き）して、実際に演説する・手紙を読み上げる。
【憲法】を選んだ人は補足資料を作成（キーノートを利用するかB紙にペン書き）して、活かし方を説明する。

【その他】

- (1) 発表後、作成した資料を提出する。
- (2) 発表者の提案を良く聴いて、自分のレポート作成に活かす。
- (3) レポート作成については後日、指示。
- (4) iPadの数に限りがありますので、譲り合って利用してください。（特に2・3組）

授業ではA3で配付した。

カリキュラムの図

「諸資料を基に考察する日米関係」

9 情報交換

【目的】

・他者の意見を良く聴いて、自分の発表に活かそう。(今回のグループ興味を持った資料ごとに作っています。)

【注意事項】

(1) 発表者は、資料に興味を持った理由、発表方法を選んだ理由、今までの調査で分かったこと、発表を通して一番伝えたいこと等について90秒で説明する。

(2) 他の人は、発表を良く聴いて、自分と同じような意見、異なる意見を含めて、参考になった点をまとめる。

発表者	参考になった点/疑問に思った点
() 番 氏名 ()	
() 番 氏名 ()	
() 番 氏名 ()	
() 番 氏名 ()	
() 番 氏名 ()	

() 組 () 番 ()

図7 情報交換用のワークシート

授業ではグループメンバーの氏名を明記した状態で配付した。ここで得た情報や手がかりを発表に活かす生徒が多くいた。

公開授業の形態をどうするかは初期の段階から悩み所であったが、科会での検討や真島先生のご助言から、それまでの授業の成果を踏まえた生徒の発表の場とすることに昨年5月頃に決定した。そして、発表の方法については、図6に示したような条約提案、演説、風刺画など授業で紹介した諸資料の方法から選ばせることとした。また、選択肢を広げて取り組みやすくさせるために生徒が調査していく対象は日米関係の問題点に限らず、国際社会の問題点も含めることとした。つまり、生徒が取り組む課題は、

- ① 授業で触れた諸資料の中から興味や疑問をもったものに関する歴史について調べること
- ② 現在の日米関係（または国際社会）の問題点を見つける
- ③ ①から分かったことを活かして②の問題を解決し、日米関係（または国際社会）をより良くする方法を提案する

の3点とした。これを条約提案、演説、風刺画などで発表をし、さらにこの発表を参考にして最終レポートを作成するというのが、一連の流れである。図8は生徒がどの資料に興味を持って調べたか、どの方法で提案したかをまとめた一覧表である。

最も興味をもった資料	人数	発表の方法	人数
日米和親条約	16	条約提案	10
ゲティスバーグ演説	0	演説	32
風刺画	2	風刺画	5
ベーブ・ルースの新聞記事	13	企画提案の新聞記事	11
硫黄島からの手紙	14	手紙	4
日本国憲法	23	憲法の活かし方	6

図8 ゲティスバーグ演説を選んだ生徒は一人もいなかった

ゲティスバーグ演説を誰も選ばなかったことは想定外だったため、この点について生徒アンケートで確認したところ、

- ・「他の資料と比べ、アメリカの要素が強いため、あまり親近感がわからないのではないかと思った。」
- ・「私は興味はありましたが、日米関係の問題をよりよくすることにつなげるのが難しいから。」

のような意見が見受けられた。授業者としては、生徒が次年度の日本史 B の授業で学習する事項（開国後、日本の最大の貿易相手国となったのはアメリカではなくイギリス）の要因として南北戦争を取り上げたのだが、それを伝えることが出来ていなかったのは反省すべき点である。

逆に最も多くの生徒が憲法を選んだが、その理由としては

- ・「憲法があるだけじゃなくて、活かし方も考えて憲法をしっかりと知れたらいいなと思ったから。」
- ・「憲法や条約を変えるのは難しいので、今ある憲法をどう活かすかが大切だと思ったから。」

のような、憲法について理解を深めたい、活かし方を考えたいという積極的な理由が多くあげられた。

また、発表方法では演説を選んだ生徒が最も多かったが、選んだ理由として

- ・「これしかやれなさそうだから。」
- ・「いちばん簡単そうだったから。」

のような消極的な理由もあったが、

- ・「自分の考えが一番伝わると思ったから。」

のような積極的な理由がとても多かった。また生徒が理由にあげているわけではないが、ガイダンスの際に、同じ高校生の事例としてスウェーデンの環境活動家グreta・トゥンベリさんが昨年の国連気候行動サミットで行った演説の動画を見せたことも影響しているかもしれない。

(3) 発表（当初予定の第13回、実際は第15回）

ここまでの準備を経て、生徒は発表に臨んだ。当初はタブレット端末のアプリを活用して発表させることを全員に求めることも検討したが、タブレットの台数が限られていることもあり、紙媒体にマジック書きする方法も追加した。結果的にどのクラスでもバランスよく分かれたので、タブレットが不足するなどの混乱を避けることができた。図9は事前に生徒に示していた相互評価の基準に沿ったルーブリックで、図10・11は生徒の発表の様子である。

発表者：() 組 () 番 ()

評価	興味を持った資料について	現在の日米関係（または国際社会）について	発表の分かりやすさについて	
4	興味を持った資料から自分が読み取ったことと資料に関する日米の歴史を説明して、発表に活かしている。	現在の日米関係（または国際社会）の課題について十分に調べて、その具体的解決方法を説明している。	選んだ発表方法や補足資料を十分に活用し、聴き手に伝えやすいように口頭で説明できている。	
3	興味を持った資料から自分が読み取ったことを説明して、発表に活かしている。	現在の日米関係（または国際社会）の課題についてある程度調べて、その解決方法を述べている。	選んだ発表方法や補足資料をある程度活用し、口頭で説明できている。	
2	興味を持った資料について述べている。	現在の日米関係（または国際社会）の課題については述べているが、その解決方法は十分に伝わってこない。	選んだ発表方法や補足資料は活用できていないが、口頭説明で補っている。 または、発表方法や補足資料は活用できているが、口頭説明が十分に伝わってこない。	合計
1	興味を持った資料が何か、十分に伝わってこない。	現在の日米関係（または国際社会）の課題とその解決方法が十分に伝わってこない。	選んだ発表方法や補足資料が活用できておらず、口頭説明も十分に伝わってこない。	

図9 ルーブリック

授業ではA4で2段、両面刷りにして使用した。評価基準を示したのは情報交換後（当初予定の第8回）だったが、ガイダンス（当初予定の第5回）で示せば、生徒はより取り組みやすかったと思われる。



図10 B紙での発表
この生徒は風刺画を活用した。

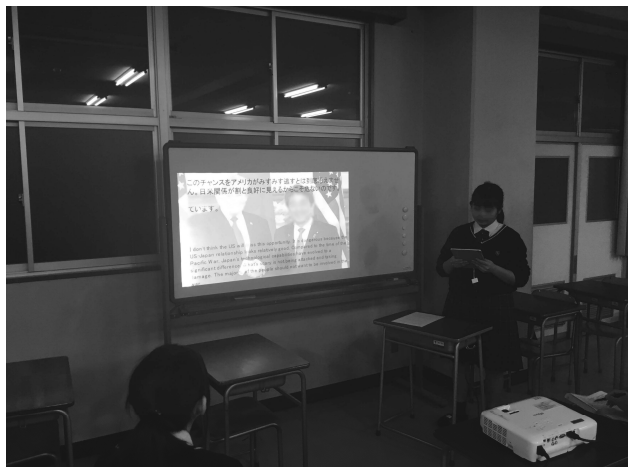


図11 タブレット端末での発表
原則キーノートを利用した。

5. 実践の振り返り

(1) 研究協議会より

研究協議会での質問・意見、及びその後の参加者アンケートに記された意見について幾つか紹介したい。

1) 懸念材料

研究協議会では、「一部の生徒の発表では、安易な武力行使に繋がりがねないような内容もあり、配慮の必要性を感じた。」という意見を頂いた。また、アンケートには「憲法関係の発表では少し危うい感じがしました。なぜこのような憲法が制定されたのかの学習が自分なりにどこまでやっているのか、歴史的な背景を踏まえての意見なのか気になります。」という意見も記されていた。同様の懸念は授業者も発表の準備段階から感じていたが、本実践では生徒が考えたことを尊重するという方針で、あまりに極端な場合を除いて、特に指導や説明を加えることはしなかった。お互いの発表を聴いて、考え方の修正が出来れば理想だが、現実的には今後の授業を通して、生徒に多様な意見があることを紹介して、調和を図る必要があると認識している。

2) その他

懸念材料の他は、以下のように生徒の発表に高い関心を示した意見が多く出た。

- ・「生徒さんの発表している様子を見て、表現する力がしっかり身に付いていることを感じました。日頃の先生方のご指導の成果であると思います。」
- ・「大変意欲的な研究授業でした。生徒たちもそれぞれの視点から積極的な発表を行っており、主体的な学びができていたと思います。日米和親条約をもとに現在の日米関係の課題を考え、締結時と現在を比較するというまとめ方をしていたものがあり「新しい」歴史学習を考えていく上で新鮮さを感じました。」

実は授業者自身、当初は生徒たちが公開授業でどれ程の発表ができるのか不安であった。しかし、調査活動への取り組み方や、情報交換での積極的なやりとりを見ていて、それなりの手応えを得て公開授業に臨むことができていた。本実践を通して生徒たちが見せてくれた自ら学ぶ姿勢、他者へ伝えようとする姿勢、他者から学ぼうとする姿勢は今後とも育てていくべき要素だと強く感じている。

3) 評価について

本実践は全 15 回と振り返り 1 回（主にアンケートを実施）と長期に及ぶ活動であった。当然、この活動の成果を評価に加えるのだが、現在本校では定期考査にかなり比重を置いた評価をしている。このため、2 学期の中間・期末考査では活動の成果を測れるように以下のような出題をした。

○中間考査

あなたが江戸幕府の役人だったとしたら、アメリカ側と何語で交渉しますか。根拠を含めて 100 字以上 140 字以内の文章で述べなさい。

- 【採点基準】
- 1 字数制限を守れているか。
 - 2 誤字・脱字なく文章が整っているか。
 - 3 使用する言語とその根拠を明確に示しているか。
 - 4 当時の情勢を踏まえて根拠を示しているか。

○期末考査

問 2 のようなスポーツや文化を通じた交流はより良い国際社会を築く契機となる可能性を持っている。このような観点からすると、来年、東京で開かれるオリンピック・パラリンピックは国際社会をより良くする絶好の機会とも言える。現在の国際社会の問題点を一つあげ、オリンピック・パラリンピッ

クの開催中にどのような取り組みをすれば、問題の解決に繋がるか提案しなさい。字数制限 200 字以上 220 字以内。

- 【採点基準】
- 1 字数制限を守っているか
 - 2 誤字・脱字なく文章が整っているか
 - 3 国際社会の問題点を指摘できているか
 - 4 外国から多くの人が集まることを踏まえ、解決策を提案できているか

68名の生徒のうち、2回とも5名前後がほぼ白紙の状態であったが、ほとんどの生徒が意欲的な解答を示した。とは言え、この出題だけで活動の成果を測るにはまだまだ不十分である。約2年後に迫った歴史総合の実施までに、探究活動や主題学習について適切に評価する方法を構築していく必要がある。この点について、授業者として最も危機意識を持っており、研究協議ではこちらから評価方法について質問を試みたが、回答はなかった。なお、参加者アンケートには次の意見が寄せられた。

・「評価についてはおそらく公立高校での検討は遅れていると思います。(現状・考査重視です)協議中、この点についてのアイデアが出なかったのはこの現れだと思います。今後考えていかなければいけない課題ですね。」

今後、本校でも評価方法について検討を重ね、他校にも提案できる体制を整えていきたい。

(2) 生徒アンケートより

生徒のアンケート結果をまとめたのが、次の図 12 である。

1 活動全体を通して、通常の授業と比べると取り組みはどうでしたか。			
かなり積極的 24人 (38%)	やや積極的 31人 (50%)	変わらない 5人 (8%)	積極的でない 2人 (3%)
2 活動を通して、歴史学習(世界史A・日本史B含む)に対する意欲は増しましたか。			
かなり増した 7人 (11%)	増した 25人 (41%)	やや増した 20人 (33%)	変わらない 9人 (15%)
3 英文を資料として扱ったことで、英語学習に対する意欲は増しましたか。			
かなり増した 1人 (2%)	増した 7人 (11%)	やや増した 18人 (27%)	変わらない 40人 (61%)
4 漢文を資料として扱ったことで、漢文学習に対する意欲は増しましたか。			
かなり増した 1人 (2%)	増した 6人 (9%)	やや増した 17人 (26%)	変わらない 42人 (64%)

図 12 生徒アンケート結果(抜粋)

小数点以下を四捨五入して表示している。

アンケート項目 1・2 より、多くの生徒が本実践に積極的に取り組み、その結果、歴史学習に対する意欲が高まっていることがわかった。以下は項目 1・2 で左側 2 つ(高い方の評価)を選んだ生徒たちの選択理由である。

○項目 1

・「私は中学 3 年生の授業で学習した時から日本国憲法に興味を持っていて、本を読んでいくくらいなので、授業でより深く知ることができて、とても楽しいと感じたから。」

- ・「いつもの座学では体験できないような新鮮さがありました。そして自分の興味をもったものを調べるとのことだったので、やりやすかったし、楽しかったです。」

○項目 2

- ・「語句やそれに関する話は聞いたことがあったけど、映像や資料を見て、「こんなことがあったのか」と実感して、これから同じような戦争がおこらないように過去のことを学ぶことは必要だと思ったから。」
- ・「歴史はもともと好きだったけど、自分の知らなかった日本と外国の歴史を知ることができて、一つの発見にもなったので、ニュースの見方も変わりました。」

上記のような意見からも生徒たちが資料読解を通して積極的な姿勢で授業に取り組んでいたことがわかる。本実践は「学びの喜び」を感じられる授業にはなったのではないだろうか。しかし、一方で通常の授業については、

- ・「授業を受け身ではなく、自分自身で取り組む必要があったので、積極的に取り組めた。」

と同様の意見も複数あり、こちらが思っている以上に生徒は受動的な姿勢でいることが判明した。これでは「学びの喜び」に繋がらないので、今後の授業改善の契機としたい。

また、項目 3・4 は日米和親条約、日本国憲法を扱った授業での教科横断的な要素に対する質問であるが、他教科の授業との関連から学習意欲を高めようという狙いは期待通りにはいかなかった。以下は項目 3・4 で「変わらない」を選んだ生徒たちの選択理由である。

- ・「英語と日本語で若干ニュアンスが違うという点は面白いけど、英語は元々苦手であるから。」
- ・「英語に対する意欲は変わらないけど、世界史で英語を扱ったことで少しくイズ感があったおかげで集中して考えることができて良かった。」
- ・「漢文資料をそこまでしっかりと読んでいなかったから。日本語訳ばっか見てたから。」

総じて、もともと英語（漢文）が得意な生徒に対して学習意欲を増す効果はわずかではあるが認められたものの、英語（漢文）が苦手な生徒に対しての効果は認められなかった。今年度は教科横断の取り組みについて、他校の研究会等で多くの実践事例が報告された。これらを参考に本校でも魅力ある教科横断型の授業を提案できるようにしていきたい。

6. 今後の展望と課題

多くの生徒が長期に渡った今回の活動に積極的に取り組むことができた。これは生徒アンケートからも読み取れるが、実際に授業担当者として生徒と接する中でも十分に感じ取ることができた。なお、生徒アンケートでは、「活動を通して高められたと思うものを3つまで選んでください。」という項目も設けたが、その結果は以下の通りである。

資料を読み解く力 4名	情報を収集する力 36名
情報を整理・分析する力 27名	社会の諸問題への関心 25名
社会の諸問題を発見する力 6名	社会の諸問題の解決に向かう姿勢 7名
人の意見を吸収する力 18名	自分の意見を発信する力 21名
計画性 11名	歴史の基礎学力 8名
	やり遂げる姿勢 5名

情報を収集する力、次いで情報を整理・分析する力を選んだ者が多かったが、これは与えられた資料を手がかりに生徒がみずから調べ、学んだ結果であろう。これからの時代を生きるための能力として想定した問題発見、問題解決に繋がる力の育成という点では今後課題を残しているが、社会の諸問題へ

の関心を高められたと回答した生徒も多い。生徒アンケート結果の項目 2 の選択理由以外にも関心の高まりを示す記述は複数あり、最低限の成果は残せたと捉えている。

また、対話の際には「話し合い」以上に「聴き合い」を生徒に意識させ、他者の意見を参考に自らの考え方を深められるように指導してきた。自分の意見を発信する力と人の意見を吸収する力の数が拮抗しているのは、その成果と言えるだろう。

最後に、これからの時代に求められるとは言え、全ての生徒が探究活動や主題学習を好むわけではない。特に対話や発表については、出来ればやりたくないと思っている生徒もおり、生徒アンケートの項目 1 で「積極的でない」を選んだ生徒は理由に「発表が嫌いだから。」をあげている。学校現場にいると、このような生徒が増えていることを感じるし、今後も増えていくことが予想される。グループ活動を採用せず、一人で調査・発表をさせた理由の一つはこのような生徒への配慮である。また発表の方法として風刺画を設定し、5名の生徒が風刺画を活用した。風刺画を選んだ生徒の一人は「やや積極的に取り組んだ」理由に「文字を書くよりも絵を描く方が楽しいので、いつもより少しはりきっていました。」と回答しているが、風刺画の設定はこの生徒にとって救いとなったようで、最後の発表も普段より生き生きと取り組んでいた。

多様な生徒がいることを念頭に工夫を重ね、少しでも多くの生徒が歴史学習に意欲的に取り組めるよう、そして生徒の生きる力を育めるよう、今後も積極的に探究活動・主題学習を取り入れていきたい。

7. 謝辞

愛知教育大学社会科教育講座の真島聖子先生には、構想段階からお力添えを頂き、発表方法の検討やルーブリックの作成など、適切なお助言をしてくださいました。先生のお助言で本実践をより充実させることができました。この場を借りて、改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。

8. 参考文献

文部科学省（2010）「高等学校学習指導要領解説 地理歴史編（平成 22 年 6 月）」

文部科学省（2018）「高等学校学習指導要領（平成 30 年 3 月）」

文部科学省（2018）「高等学校学習指導要領解説 地理歴史編（平成 30 年 7 月）」

五百旗頭真（2008）『日米関係史』、有斐閣ブックス

M・C・ペリー、F・L・ホークス編、宮崎壽子監訳（2014）『ペリー提督日本遠征記 上下』、

KADOKAWA

加藤祐三（2012）『幕末外交と開国』、講談社学術文庫

森田健司（2018）『現代語訳 墨夷応接録 江戸幕府とペリー艦隊の開国交渉』、作品社

ロバート・K・フィッツ著、山田美明訳（2013）『大戦前夜のペーブ・ルース 野球と戦争と暗殺者』、
原書房

栗林忠道著・吉田津由子編（2002）『「玉碎総指揮官」の絵手紙』、小学館文庫

畠山雄二・池上彰（2016）『英語版で読む 日本人の知らない日本国憲法』、KADOKAWA

小田原健一・川上佳則（2019）「総合的な学習の時間の実践報告－教科横断と高大連携の可能性を探る試み－」『本校研究紀要第 46 号』

国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp>